

本多八幡神社の来歴

本多八幡神社は、本多新田^{ちん じゆ げん ぶん}の鎮守として元文元年^{おとこやま かんじよう しょうおう じ} (1736) に京都の男山八幡社を勧請する形で祥応寺の境内に創建されたと伝えられています。

建立当時から専任の神職を置かず、江戸時代は国分寺が、明治時代以降は祥応寺が神社を維持していました。現在は、小金井神社の宮司が兼任し氏子^{うじこ}が中心となり各行事を運営しています。例大祭は、近年では秋の開催となっており、本多囃子会^{はやし かい}が奏でる祭囃子^{まつばやし}にのせて、神輿^{みこし}・山車^{だし たいこ}・太鼓が町内を巡行する様子を見ることができます。

国分寺市重要有形民俗文化財

本多八幡神社神輿



一之宮小野神社

本多八幡神社神輿は、記録と伝承によると一宮村^{いちのみや むら} (現多摩市)の一宮大明神^{いちのみや だいみょう じん} (現一之宮小野神社)の神輿として建造されたもので、北多摩地域で現存する神輿の中では最古級のものです。昭和10年(1935)に一宮大明神が神輿を新調したことで、翌昭和11年(1936)に本多八幡神社に譲渡され現在まで伝わっています。

本神輿は文政3年(1820)に建造され、一宮大明神の祭事のほか、大國魂神社(府中市)の大祭(くらやみ祭)では府中の旅宿までの渡御が許された記録もあり、地域の祭事に使用されてきました。

神輿本体は明治32年(1899)と昭和51年(1976)の修繕を経て、現在は頭頂部に大鳳(鳳凰)ではなく金箔の塗装が施された宝珠が据えられています。野筋はゆるやかな曲線を描き、屋根を支える杵組は2段という簡素な構造で、台輪も直線的な形状となっているのが特徴です。

2度の修繕を経たため建造当時の姿は不明ですが、200年以上にわたって地域の祭礼で使用されており、市内の信仰を示す貴重な民俗資料となっています。



写真提供：一之宮小野神社

国分寺市重要有形民俗文化財

本多八幡神社の力石

力石は、「力持」という米俵や石などの重いものを持ち上げる力競べに使われた石です。

この競技は、江戸時代後期から明治時代にかけて神社の境内などで行われ、優勝者が記念に自身の名前などを刻んで神社に奉納するようになりました。

本力石には、表面に「奉納三拾貫目」右側面に「文久二戊八月十五日」左側面に「當所 願主 藤野栄治郎」と刻まれており、文久2年(1862)に富士野(藤野)栄治郎が持ち上げたことを記念して本多八幡神社に奉納したことがわかります。多摩地区では数が少なく貴重な資料です。



左側面



正面



右側面

国分寺市重要有形民俗文化財

指定年月日：平成26年(2014)4月1日

大きさ：縦48.3cm 横40cm / 高さ：34.1cm / 重さ：92~108kg (推定)